

# 幼児の 教育

家庭・保育所・幼稚園

9  
2005





最

新

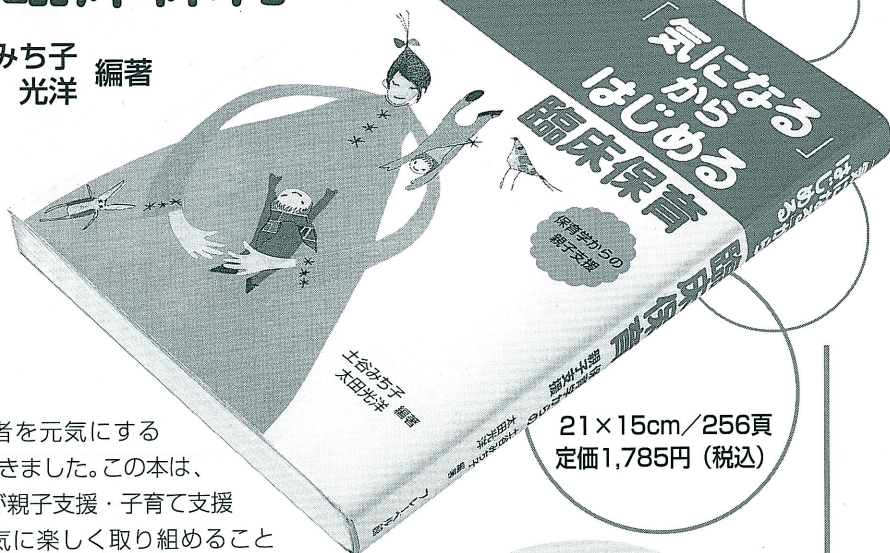
刊

# 「気になる」 から はじめる

保育学からの  
親子支援

## 臨床保育

土谷みち子 編著  
太田 光洋



21×15cm/256頁  
定価1,785円(税込)

「保育者を元気にする本」ができました。この本は、保育者が親子支援・子育て支援に、元気に楽しく取り組めることを願って書かれたものです。

「気になる」をキーワードに、親子支援・子育て支援の現場を第一線で支えている保育者の実践を多数紹介し、「気になる」ことについて保育者がどんな見立てを行い、どんな支援をしていたのかを詳しく述べています。子どもの命の輝きを引き出し、人生の土台を支えている保育者。そんな保育者に向けてエールを送るものです。

### 【目次から】

- 序 章 臨床保育とは
- 第1章 子どもが「気になる」
- 第2章 親が「気になる」
- 第3章 親子関係が「気になる」
- 第4章 保育者の環境が「気になる」
- 第5章 子育ての支援環境が「気になる」
- 第6章 「気になる」とはどのようなことか

キンダーブックの

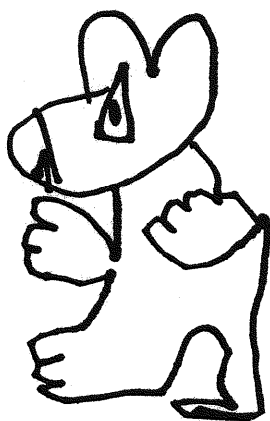
**フレール館**

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。



# 幼児の教育

第104巻 第9号





# 幼 児 の 教 育 目 次

## — 第一〇四卷 第九号 —

© 2005  
日本幼稚園協会

巻頭言 保育学の林に立つ美しい木々 ..... 津守 眞... (4)

児童学からの出発 地域・子ども・大人の「関係をつなぐ」(1)

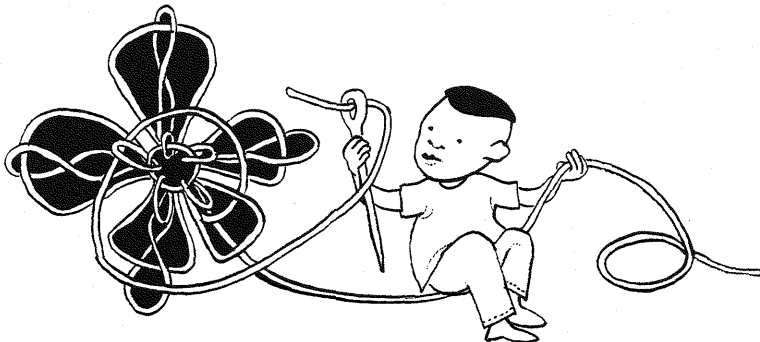
— 東横学園女子短大子育て支援センター『びっぴ』の取り組み —

..... お話 小川 清実... (8)

子どもの写真に見る大人の眼(2) — 写真を楽しむ行為から — ... 荒川志津代... (17)

十八世紀ドイツの子どもの本(5)

クリステイアン・ゴットヒルフ・ザルツマン『かにの本』... 佐藤 茂樹... (24)





私に通った幼稚園・保育園(4) 幼稚園の思い出……………福元真由美…(32)

特集へあまい～

農の現場から『あまい』を考える……………古谷 久美…(38)

通りすがりの「あまい」出来事……………松沢 孝博…(42)

読みが甘いか……………前田 峰子…(46)

自閉症児Aさんの場合……………大蔵みどり…(50)

たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(6)……………庄籠 道子…(54)

くぐること……………吉岡 晶子…(58)

表紙絵／中井絵津子

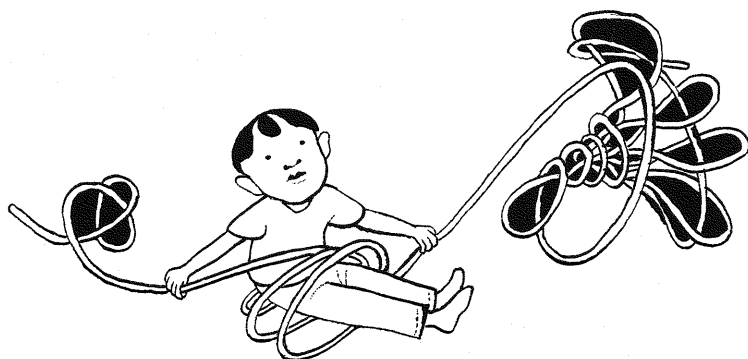
扉題字／津守 眞

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「ししゅう糸」

編集委員／浜口 順子・佐藤 寛子・吉岡 晶子

編集部／河合 聡子





## 巻頭言

# 保育学の林に立つ美しい木々

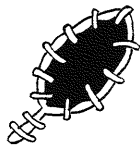
津 守 眞

この半世紀に日本の保育学の土壌に育った数々の書物は、私には林に立つ美しい木々のように見える。最近相次いで出版された三冊の書物を読んでそう思った。その一冊は三宅和夫・陳省仁・氏家達夫著『「個の理解」をめざす発達研究』（有斐閣、二〇〇四）、他の一冊は榎沢良彦著『生きられる保育空間―子どもと保育者の空間体験の解明―』（学文社、二〇〇四）である。前者は科学的児童研究であり、後者は現象学的実践研究である。もう一冊は国吉栄著『日本幼稚園史序説―関信三と近代日本の黎明』（新読書社、二〇〇五）で、幼稚園の源流を尋ねる歴史研究である。

第一。ひとりの子どもがどのように成長発達するのかを実証科学の方法を用いて行う児童







研究は、一九世紀末にスタンレー・ホールに始まり現在に至るまで、米国において著しい進歩を遂げ、日本のみでなく世界に大きな力をもった。三宅は私と同年代の発達心理学者で、同一の子どもを長期にわたって研究する縦断研究に専念してこられた。著者は最近二、三〇年は、実証的心理学の手法による日米共同研究の一端をも担われたが、日本の子どもを考える時、われわれ自身のバックグラウンドである社会、文化、時代的情況を考えねばならないと言う。この書物では、自己の歩みを振り返りつつ、二十世紀後半の縦断研究の成果について正直に記している。「研究者は個人と同じように発達する。研究もまた発達する。」役に立つという基準は時代とともに変化する」「日本の子どもや家庭や学校の抱えている解決を迫られているような問題に目を向けること」なしには先を進められないなど、生涯を縦断研究に費やされた著者の貴重な見解が記される。後半、若い研究者の執筆による「共同注視」の章は神経学的実験研究であるが、乳児が見つめるものに大人が関心を寄せるとき、それは感動となって乳児の心に残るという私共の保育体験につながる。発達は子どもと大人との共同作業である。

第二。著者榎沢は、現象学の考え方に立ち、自ら保育の実践にかかわり、保育者と子どもとの共同の営みとして展開する保育の探求をこの本の課題とする。フツサルによって始められた現象学が、ランゲフェルトらによって教育の分野に取り入れられたのは、二十世紀半ばである。子ども不在の実証的心理学に対抗して、子どもの人間学を主張して闘ってきたも

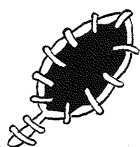




うひとつの児童研究運動である。榎沢の書物は、現象学を消化して書かれた本格的な保育理論の書物である。人為的な実験場面ではなく、日常生活場面で主体的に動く子どもと保育者とが、空間をどのように体験し、どのように意味づけるかが重要なのだと著者は言う。日本の保育には、常識として当然と考えられていることがあまりにも多い。無心になって直接子どもに触れて考えるならば別の世界が見えてくるはずである。榎沢は幼稚園や保育園での具体的な保育場面を丁寧に解きほぐす。その方法は、「理念や観念の衣を脱いで、根源的な生活世界の経験へと還る」現象学的還元（反省）である。巻末に現象学の用語解説が加えられている。日本人は現象学的思考法が伝統的に馴染んでいると西洋の現象学者たちは言うが、それを意識して自己研修を積み重ねれば常識と因習的伝統に堕してしまう危険を孕んでいる。ここでもフツサルから数えると一三〇年の歴史を経ている。

第三。国吉栄著『日本幼稚園序説―関信三と近代日本の黎明』。この本の主題である関信三は、日本で最初の幼稚園を創った人として知られているが、一八七六年という幕末明治の動乱期になぜ幼稚園だったのか、次々に疑問が湧いてくる。破邪顕正運動、太政官者、英国留学し、帰国して幼稚園長となり、フレーベルに関する諸著作を翻訳する。表面の履歴だけでは分からない内心に何が起こっていたのか、著者はそれらの疑問をひとつひとつ原典に当たって解いてゆく。そして明治初期の日本の精神史にまで迫ろうとする。「寡黙であったが彼自身が、謎に満ちた保育史の迷宮を解く私の手引き者となって、予想もしなかった眺望を





開いてくれた」と著者は言う。常識的解釈を排し、本当のところを探ろうとする態度は、現在の保育を考えると、至る所で求められている。近代日本の黎明と副題がつけられているが、近代日本とはいつのことなのか、既に来ているのか、これから来るのか。動乱の二十世紀の幕開けを生きたことになった私も、考え込んでしまう。東洋と西洋のはざまに立つ日本、アジアの中にある日本、諸宗教の間にある日本、スピリチュアルな面を抜きにしては考えられないだろう。激しい変化の時代にあつて個人のアイデンティティーはどこに求められるのか。

幼児と毎日を過ごす保育者にとっては、話は案外簡単かもしれない。どんな動乱の時代にも私共が子どもを信頼しさえすれば、子どもは惜しみなく大人を信頼する。保育者はそういう世界に住んでいる。今日、そういう世界を自分たちのまわりにつくることができるのだから保育者は幸いである。

保育研究の歴史には、その中の研究者たちのそれぞれの人生がある。いずれもが新たな芽を吹き、新しい樹木が育ってゆく。ここには、最近ばかりでも相次いで手にした書物について書いたが、これらがシンボリックに保育という人間の育つ土壌をあらわしている。他の多くの美しい木々を思いつつ、私もその列に加わって歩き続けたい。

(保育研究者)



# 地域・子ども・大人の「関係をつなぐ」(1)

―東横学園女子短大

子育て支援センター『ぴっぴ』の取り組み―

お話 小川 清実

聞き手 首藤 美香子

「『ぴっぴ』に行くよ」と声をかけると、ぐずっ  
ていても泣き止むという子どもたち。「『ぴっ  
ぴ』があったから、育てられた」「こんなところ  
があったら、私、もう一人産むわ」と、来訪者  
が妊娠して、「生まれました」

と赤ちゃん連れで遊びに来る。「ここがなかつたとき  
のことを思い出せません、どうやって孫を育てていたかわ  
からない」というおばあちゃま。「私の国でもこんな  
サービスをやってみたいわ」という外国人。



少子化対策の一環としての子育て支援施設が、大学の常設機関としてはじめて設置され、地域の親子が月曜日から土曜日まで利用できることとなった東横学園女子短大子育て支援センター『ぴっぴ』。二〇〇四年四月に三年制の保育学科が新設されたのに伴い、時代を担う質の高い保育者養成と地域貢献を掲げ、同年六月一日に開設されてから一年余りがたつが、一度訪れた親から友人へと口コミでその評判が伝わり、一日の利用者が六十組近く、百人を超えるほどの支持を得ている。五月末現在まで（初年度一年間）の利用者は、のべ二万六、六八一人で、その目覚ましい成果に注目した厚生労働省や地方自治体関係者、教育機関からの見学も多いという。

保険料として一日百円の利用料を取る以外、年齢や時間帯による入場制限は特にない。デザイン性豊かで安全面に配慮された木製の手作り家具や外国製の珍しい遊具が置かれた百六十平米のオーブンスペースは、赤ちゃんから就学前までの異年齢の子どもたち、そして障がいのある子どもや外国人の子どもが出会い、混雑時はお互い

を気遣いながら遊ぶ。子どもたちは、母親や父親だけでなく、祖父母やベビーシッターさんに伴われており、家庭環境や子育てに対する価値観の違いを乗り越え、成長のひとつときを共有できる場となっている。

『ぴっぴ』には常時、専任の保育士が就いているが、保護者に代わって子どもを一時的に預かることや、専門家による子育て相談・指導といったことは特別にはしていない。地域の子どもたちが気軽に遊びに来られる場を提供していくなかで、子育てに関わる大人一人ひとりが責任と自信を持って子どもと向き合い、自然に学んでいくよう、地域に生きる子どもと大人の「関係をつなぐ」ことを大きな目的にしているからだという。

「ここに来ると、なんだかほっとする」「家にいるときよりも子どもに優しくなれる」という『ぴっぴ』の魅力と理念を、運営責任者である同短大保育学科長・小川清実先生に伺ったので、本誌で三回にわたってご紹介したいと思う。

（インタビュー 平成十七年一月二十八日）



## 出産してはじめて気づいた地域のつながり

——いつ頃、どんなきっかけで、子育て支援の必要性を認識されたのですか。具体的なエピソードを挙げてお話しいただければと思います。保育研究者として、近年の子育てを取り巻く変化の兆しや危機感といったものがあつたとしたら、漠然としたものでも結構ですからお話しください。

小川 私自身が母親になったときからだと思うのだけれども、母親だけ、またはあるひとつの家庭だけでは、子どもは育てられないということです。これは実感で、私自身、子どもを持ったときに一番感じたことかなと思うのです。

それまで仕事をずっとしていたでしょう。もちろん仕事をしながら産休をとって、子どもを産んでという形で母親になりましたが、「仕事を持っているというのとはどういうことか」というと、「その地域のことを何も知らなかった」ということなのですね。子どもが生まれて、

お散歩で外に出られるようになる時期があるでしょう。そうすると、「あら、ここにこんな子どもがいたの」という、その地域の親子ぶりがはじめてわかったということがあります。

私は仕事を持っていたからわからなかったけれども、私の家の通りには、上の子と同じ年齢の子が何人もいたのね。その路地は、子どもがわいわいと遊んでいるから、昼間は車が入ってこないようになっていて、いろいろな子どもたちが集まる遊び場になっていたということも、私ははじめてわかったのです。「ああ、そうか」と思って、公園デビューなんていうことも全然なく、公園に行くよりも、まずその路地で、子どもはほかの子どもを知り、私もほかのお母さんたちと仲よくなった。

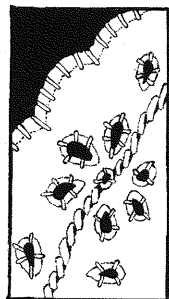
うちは、おじいちゃん・おばあちゃんが一緒に所帯でしたが、お互いのことは、ずっと一緒にいなければ、よくわからないでしょう。育休してずっと一緒にいることで、少し窮屈になったりすることが、あるでしょう。だから、私も子どもを連れて、外に遊びに行っちゃうわ



け。

そうすると、そこでだんだん「お昼ご飯食べない？」とか、「おやつを一緒に」という関係ができてきた。その路地に住む人たちは、下町出身の人がたまたま多かった。それから、ご主人の転勤で地方から東京へ来たという方たちもいた。私は、子どもを連れて出入りできる家というのが四軒あった。うちもそういう家になっていったから、五軒ぐらいの家を、子どもたちも自由に出入りしていた。

だから、うちの子は、言葉をまだあまり言えないころから、ひとりでトコトコ出て行って、いつも行っているおばちゃんの家にも何とも言わずに入っていってね、みんな開けっ放しだったの。いい時代で、玄関を閉めてなかったの。どの家もすべて開放的で、「どうぞいつでもお上



がりください」だったわけね。その家に入っ  
て、その家の冷蔵庫を  
あけて、何を食べよう

かと眺めていたときに、「冷蔵庫を開けちゃだめよ」なんて、よその家のおばさんに怒られたりして、そういう関係が、とてもあったの。

「何時に誰その家に集まって」なんていう（お誘い）がいつもあって、私は仕事の都合でベビーシッターさんを雇っていたけれども、そのベビーシッターさんが家にいる時には、他の子どもが遊びに来てくれたり、とても自由にやれたのね。私もよその子を怒っていた。そういうふうになり合えるような関係の仲間がいたということが、実はすごくありがたかった。

### 親の一番の悩みは親同士の交流がないこと

小川　うちの子どもがまだ幼かった頃、地域の公民館が主催している「幼い子どもを持つ親の講座」というのがあってね。毎週一回、何か月間が続く長い講座に、講師として参加しました。そこで出会った親たちのいろいろな話を聞いていると、親が一番悩んでいるのは、「親同士の交流がないこと」で、そのために死にたくなっている



る人がいたことなのですね。

例えば、夜泣きですごく大変な子どもを抱えているというお母さんが、「なぜ自分はそれを越えられたか」という話をしてくれるわけ。そのとき、「この子を殺して自分も死のうと思った」というところに至るまで、涙ながらに話すの。それは大体、結婚して知らない土地にやってきて、そして誰も友だちがいない。つまり、友だちといわないまでも、大人同士で話す相手がなくて、子どもが生まれて、やっていく中で、どんどん困っていつちやう。

特に夜泣きがひどい子を持っていて、ご主人は疲れて帰ってくるので、夜ぐらいいは寝かせてあげたいと。夜、どうしていたかというところ、その人は、ずうっとおんぶか抱っこで、夜中じゅう、外を歩き回っていたというの。そういうことを、ずうっと一人だけでやっていたら、これはおかしくなるでしょう。

その人は、昼間、泣く子を抱っこして道を歩いているとき、近所の少し年配の人、ここの家の人だというのは

わかっていても普段は話さない人に出会って、どういうはずみだったか、「この子は夜泣きがひどくて、本当に大変で」と、ふつと言ったらしいの。そ

したら、その年長の人が「あら、よく泣く子って頭がいいっていいですよ」と言ってくれたというのね。その一言で、そのお母さんは本当に救われたわけ。「この子は、今、泣いているけれども、頭がいいんだ」と……。

私は、その話を伺った当時、「よく泣く子は頭がいいか」ということを調べたのね。(笑) そうしたら、それに近いようなことわざが長野にあったの。よく「寝る子は育つ」と言うけれども、「泣く子は育つ」というのがあった。

子どもは泣かないと育たないでしょう。泣いていいわけでしょう。でも、一人でそれを相手していたら大変。





けれども、いつも自分が抱っこしている子を、たまに違う人が、「ほら、抱っこしてあげるわよ」と、代わってくれたら、ちょっとうれいでしょう。(子どももつて) ずつといないと困るけれども、ちょっといいないと助かるというか、ちょっとほつとする。

やっぱりそういう関係が、昔はあったと思うのね、地域があつたから。けれども、今のお母さんたちは、そういう意味で、地域がない。一人だけで育てている。それで、「完璧」に育てようとするの。よくご存知でしょうけれども、「本当に完全に、すべていいことだけで育てよう」とするから、今の子育ては、それはそれは大変になつちやつてゐるのね。

### 人間関係を築くのが気楽ではない

——それぐらい、今の親の「子育て力」が低下しているということでしょうか。

小川 「子育て力」以前に、親同士の友だちが作れない。これは、本当に大変な問題だと私も思うんだけど

も、世の中、すごく殺伐としていて……。だから、人間関係が強い緊張関係にあるの。今、短大生でも、友だちは三人ぐらいいれればいいわけ。まず、今の学生たちは、コンパがないでしょう。コンパをやらない。食事でも何でも、一緒にいてわいわいやるというような体験が随分なくなっていると思う。

例えば、短大では一応クラス分けをしているでしょう。ところが、クラスの人でも(お互いのことを)知らないことが多い。「○○さん、今日、どうしたのかな?」、「え? わかりません」と。わかるのは、四、五人のグループ内のことだけ。他の人には関心がない。この短大も割とそうだというのは聞いていたんだけど、どうなつちやつてゐるのかしらと。その数人のグループ、それだけで卒業していつちゃう。

もう一つは、その数人のグループで、何かうまくいかないときがあるでしょう。きつかけは、例えば、みんなでトイレに行こうとか、そんなレベルのことだけれども、そのときに、「私、今、行きたくない」と言っ



ちゃったとする。そうすると、そんな単純なことで、そのグループから外されちゃうなんていうことが、短大生であるのよ。そうすると、その外されちゃった子が、「もう学校に行きたくない」くらいに大変なの。外されたら一人でいればいいし、だれか他の人を見つければいい。ところが、お昼ご飯は誰と食べたらいいとか、とにかく大問題のようなの。一人で食べればいいと思うけれども、一人で食べることが寂しいとか、何かいろいろなことがあるのね。

—— どこかに帰属していないと不安でいたたまれない。

小川 そう。大学もやめたいぐらいに悩んじゃう。そういう子が将来はお母さんになっちゃうわけでしょう。

ある地域の公民館の講座で出会った三歳のお子さんを持つお母さんが、そのころちょうど十一月ぐらいだったかな、そろそろ幼稚園を決める時期で、「決まったんですけど」と、（私の前で）ぼろぼろ泣くの。行きたくない幼稚園に決まったのかしらと思ったら、「決まったの

はいのですけれども、私が不安で、不安でしょうがないんです」って泣くのね。なぜ不安かというと、「幼稚園のお母さんたちの輪に私が入れるかどうか不安です」と。「お母さんたちのグループも幾つかあって、そのどこかに所属しないと、とても行きにくいというのを聞いてちゃって、私が所属できるかどうか、すごく不安で」と、入る前から泣いちゃって……。子どもの心配じゃなくて、自分の心配。わあ、大変だと思ってしまつて、それほど、人間関係を築くのが気楽でない。

子育て中って、「何歳？」とか、「何月に生まれたの？」、「一緒ね」とか、「最近ご飯を食べないの」、「うちはどうしてみたら食べたわよ」とか、そういうふうに気楽にいろいろ相談しながら育てていけば、そんなに大変なことではないはずなのに、気楽に声かけられない。

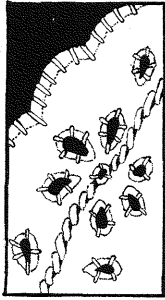
### 親と子との不安や不満を取り除く

小川 『ぴっぴ』という場があるのがどうしていいのか



というと、例えば、普通、公園だったら、何かぎくしゃくしちゃうと、そこで人間関係が切れてしまうわけ。でもここだと、お母さんと話して、もし何かうまくないことがあっても、保育士さんがいるから、保育士さんに直訴できるでしょう。「あそこにいるお母さんが、自分のお子さんのことを全然見ていないので、うちの赤ちゃんとおぶつかっちゃった」と。「だから注意してください」なんて言うお母さんもいるの。直接（自分からは）苦情は言えない。子どものようだけれども、保育士に訴えてくるお母さんもいらつしやるの。

だから、そんな時は「はい」と応えて、もちろん直接（当事者に）わかるようには言わないけれども、それとなく「赤ちゃん、どこかおけがしました？」という形で。おつけられちゃった方のお母さんは不安なわけ



しょう。そういうことで、今のお母さんは、不安だらけなのです。

『びっぴ』は六月一日

に始まったのだけれども、六月中は、その「不安と不満」がとても多かったのよ。ここは年齢制限もしていないでしよう。十時から四時、ゼロ歳から就学前。午後になったら、幼稚園帰りの親子が遊びに来る。そうすると、「ここは乳幼児のための施設でしょう？ 幼稚園に行っているお子さんは乳幼児ではないですよ？」なんて言うお母さんもいる。「一応、就学前までですから」

と。「そんなことを言ったら、あなたのお子さんは、今、一歳だけれども、三歳になったら、来られなくなっちゃう」ということが、見えないのね。危ないから時間制限してほしいなど、当初は要求がすごかったの。

（異年齢の子どもが集うことで）「あなたのお子さんは、今はこうだけれども、一年たったらああなる、二年たったらこうなる」というのが、見えるでしょうと。「こういう機会があると、ちょっと大きい子たちのあとを歩いて歩くわよ、あとについて歩いている子がいるでしょう。どんどん真似していると成長が結構早いわよ」と言って、一緒にいることの大事さを、小さい赤ちゃんだ



けを持っているお母さんには伝え、ちよつと大きい子のお母さんには、「ここはお母さんたちだけのおしゃべりはできません」、ということ伝えるにはどうしたらいいかということを工夫しました。

大きい子どもは、まず「わーっ」と走る。ものすごくよく走るから、「ここは赤ちゃんがいっぱいいるところだからね」ということで、直接子どもに声をかけていったの。「赤ちゃんにぶつからないようにね」と。あの子たちは、普段、ぶつからないように気をつけて歩いてはいないの。普通は兄弟で下に赤ちゃんがいれば、気をつけるでしょう。『びっぴ』は赤ちゃんがいる。だから、気をつけて歩こうとするようになった。今はそれを確実にわかってくださっているから、親も気をつけてくださっている。

時々ぶつかる事故もある。ここでは、すべて親の責任ですからね。今のところ、大きなけがは滑り台から落ちたこと。滑り台から落ちていますよ、親の目の前で。親

がついていても落ちる。「病院に行ったほうがいいんじゃない?」と言って、病院に行ったケースが二つあった。でも別に大きなけがではない。保険の請求は、まだありません。

親の不安をなくすために、ここでいろいろな親子を見てもらって、自分とは違う育て方を見てほしいと思っています。

〈次号へ続く〉

#### ☆児童学からの出発

子どもをめぐる社会文化状況の激変と顕在化する今日の問題に対し、子ども研究・実践の分野でご活躍中の方々がどう認識し、どのような対応策を模索しているのか、インタビューを通して紹介するシリーズです。児童学という学際性豊かな分野が、時代とどう向き合おうとしているのか、その真摯な姿勢をお伝えできればと思います。



# 子どもの写真に見る大人の眼(2)

## —写真を楽しむ行為から—

荒川 志津代

先日十代の人たちが語っていた。彼らは、装飾のきれいなケーキや花やペットなど、「かわいい」と感じたものは何でも、携帯電話機で撮る。しかも、「撮るだけ」であるらしい。電子メール機能を使って友達に送ることもあるが、それは撮ったもののうちのごく一部であるようだ。大半は電子的に保存されることもなく、やがて消去される。

どうやら写真は、記録するためだけに存在するのではないようだ。デジタルカメラの普及がこのような写真行為を促進しているが、写真はそもそも、「撮る」こと自体にも楽しさがあつた。そしてさらに、プリントして眺めたり、加工したり、友人知人に送ったりして楽しむ。今回は、そんな日常の楽しみとしての私的



写真行為を考える中から、子どもへの眼差しを考え  
てみたい。

## 一・撮る・捕らえる

「写真を撮る」という行為を衝き動かしているもの  
について説明しようとしたティスロンは、写真につ  
いて次のように言っている。「写真と世界との関係  
をなすものは、心のはたらき自体がそうであるよう  
に、連続性であると同時に非連続性でもあり、捕獲  
であると同時に潜入でもあり、融合であると同時に  
分化でもある<sup>1)</sup>」

つまり、写真を撮る時、一定の枠（フレーム）の  
中で対象をくくるのは、世界の中からフレームの中  
の世界を分断して、捕獲することであるのだろう。  
それは同時に、その一瞬、フレームの中の世界に潜  
入し、融合することでもある。フレームの中の世界  
をそのまわりの世界とは分化させるのだ。そのよう  
に考えると、「かわいい」ものを何から何まで写真

に撮ってしまう若者は、その「かわいい」世界に  
「潜入」し、「捕らえ」るつもりなのだとも思われ  
る。感じたものを捕獲する楽しさといってもよいか  
もしれない。

私たちの日常においては、花の美しさ、ペットや  
子どもの愛らしさ、家族愛等への小さな感動は、と  
りあえず捕獲したい感覚であるのだと思われる。

女子高生の間でのプリクラの流行について、かつ  
てある週刊誌が、「幸せ」の「捏造」と分析したこ  
とがあった。確かに、顔をぎゅっと寄せ合った小さ  
なフレームの中では、へこんなに仲良しな私たち  
が、捕らえられている。現実よりはるかに「幸せ」  
な私たちが捕獲されているのだ。

そして最近では、その捕らえたい感覚の世界は、  
シャッターを切る瞬間のみに依存するのでなく、加  
工によって、新たに創り出すことも可能になった。  
無理して捕獲しなくても、別の手段で表現出来るよ  
うになったということでもある。写真1では、赤ん





▲写真1 宇宙を示す絵と合成されて“舞い降りてきた”赤ん坊

坊の写真が宇宙を示す絵と合成されて、舞い降りてきた子どもといった感動を表現しようとしている。

加工はまた、鋏と糊とペンで、物理的に行われることも多い。写真が切り分けられ、再構成される。

そのような加工によって、子どもへの感覚は、捕獲されやすくなったというべきだろうか。「捏造」されやすくなったというべきだろうか。

## 二・非日常としての撮影場面

写真を撮影するという名目は、日常とは異質な場面や人間関係を作ることが出来る。このことは、こうあつたらよいという映像（絵）を求めることとともに、写真撮影の一つの動機になりえているように思われる。

### (1) 名目としての撮影

柳美里の戯曲「魚の祭り」では、写真が重要な道具立てとして使われている。作品の始まりも終わり



も、写真撮影の場面である。中ほどでは、死んだ次男のノートに、千切られた十六年前の家族写真が挟み込まれてあった場面がある。

この作品は、この次男の死による葬儀のために、家族が集まっている様子を描いたものである。長年会うこともなく、お互いの生活状況もよくは知らず、お互いに対して複雑な思いを抱いている家族であったが、葬儀の後の最終シーン

では、「写真撮りたいな。」「あたし、カメラ持つてるわよ。」「背の大きい順番に並んで。」といった会話で終わるのである。

この最後のシーンでの写真撮影は、家族の和解ともとれるが、長年にわたる確執がそう簡単に解けるものだろうか。家族のあり方に傷ついていたらしい次男を失った今、互いの心境は、確かに少しは変化



▲写真2 1912年 永田富太郎 日本写真家協会  
『日本写真史1840-1945』（平凡社、1971）より

した。葬儀を終えては、そこそこ家族らしくもあらいたいという思いを持ち、その思いを確認するための写真撮影であるように見える。もっともらしい家族写真の映像を得ることと同じくらい、撮影場面での、仲の良い家族のような行為そのものが、求められたのだと思われる。



## (2) ハレの体験

家族写真のみならず、子どもを撮影する場面そのものが日常と異質であることは多い。

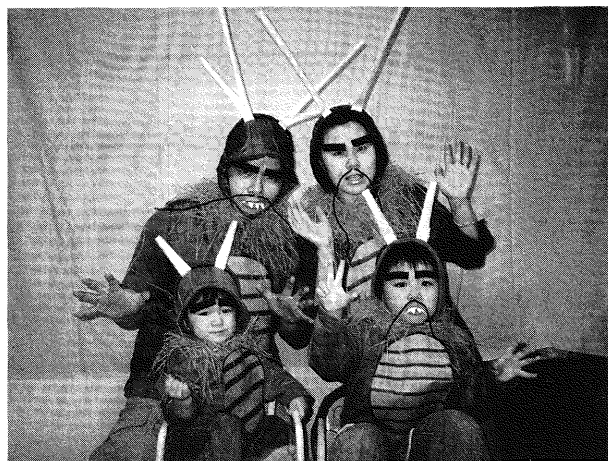
例えば写真館である。子ども専用スタジオを備えた写真館での撮影は、あれこれ着せ替えたり、それにふさわしい小物をアレンジしたりする体験そのものも、魅力のようだ。女兒の撮影に訪れたある母親は、「何しろシンデレラとかいろんなものになれて楽しいんです。夢の世界だから」と言う。そしてその夢を、絵として定着させるためには、プロの撮影技術と修正があつた方がよいというわけだ。このようなスタジオは、子ども専用写場として、婦人用とともに大正期にはすでに見られた。<sup>2)</sup> 夢の子ども像を演出するための場ではあるが、例えばそこで木馬に乗ったり（写真2）、そんな写真を撮るために子どもを写場に連れていくその体験自体が、日常とは距離がある。そしてそこでの体験は、出来上がった写真とともに、子どもを見る新たな視点を提供するも

のであつただろう。

今日では、家庭の中でも非日常を体験出来る。写真3（次頁）の年賀状写真では、四人の家族が何やら扮装をしているが、よく見ると、葉書の隅に描かれているハローキティの、竜のイラストにならつて扮装したものであつた。つまり、ありあわせの写真を賀状にしたのではなく、出す予定の葉書に合わせ、わざわざ年賀状用に撮影したものである。この家族は、毎年、賀状写真のために一家でこのような取り組みをしている。この数年は簡略化し、パソコン上で合成して作つてしまいうらしいが、子どもたちが「嫌だ」と言い出すまで、家族の行事として続けたいとのことであつた。ここでは、撮影された写真もさることながら、撮ること自体に興味がある。家族の一体感を形成する体験イベントになつてゐるのだ。

写真を撮影するその時の体験が意味を持ち、そこでは、子どもと大人が一緒に体験を楽しんでいるこ





▲写真3 ハローキティの竜のイラスト(左)と竜に扮装した家族(右)

とを見てきた。「子どもを撮る」時、必ずしも子どもは、特別な位置を与えられているばかりではなさそうだ。

### 三・外へ発信

ビエール・ブルデューの研究によれば、家庭に子どもがいることと写真機の保有との間には、きわめて密接な関係が存在するとのことであった<sup>31</sup>。今日では、写真機の保有のみならず、写真撮影行為との間にも密接な関係が存在するように見える。

例えば写真を人に見せたり、人に送るということは、人物写真の場合、小さな子どもまたは、子どもと若夫婦の写真が圧倒的に多い。年賀状の場合、思春期以降の子どもの写真や、大人だけの家族写真は極めてまれである。小さな子どもとの写真は、友人知人に送ったり、コミュニケーション誌や育児関連の雑誌に送ったりして、いわば、みせびらかす写真なのである。投稿写真用のページが用意されている



雑誌も多く、子ども写真や子どもと親の写真が、誌面いっぱいに並んでいる。子どもと一緒にいる「私」を楽しみ、アピールしている写真も多い。どれもこれも、失札ながら似たように見えるけれども、一枚一枚をよく見ると結構おもしろい。

かつての、記録という意味あいの強かった子どもや家族の私的写真では、子どもと自分との関係性や、その場面のエピソードなどの文脈（コンテキスト）抜きには、捕らえられた世界を理解することは難しかった。家族写真が、コンテキストを理解しているものにとってのみ意味があり、関係のない他人にはさしておもしろみのない、どれも似たような写真である理由はそこにあった。そのような意味では、かつての子ども写真は、個々人または家族の内へ、求心力をもつものであったと言えよう<sup>4)</sup>。

ところが現在、外に向けて発信される写真では、コンテキストはさほど重要でないように見える。今、楽しいこと、今、かわいいこと、今、しあわせ

なことが、重要なメッセージであるようだ。そのような意味では、時系列も重要ではなくなっている。子どもとの写真行為は、楽しく消費するものとなったようだ。それは私たちの日常における生活の反映であり、子どもとの関係の反映でもある。

（名古屋女子大学）

#### 注

1) セルジュ・ティスロン（青山勝訳）『明るい部屋の謎』（人文書院、二〇〇一）、一八五頁。

2) 亀井武編『東京都写真美術館叢書 日本写真史への証言 上巻』（淡交社、一九九七）、一三八頁。

3) ピエール・ブルデュー監修（山縣熙・山縣直子訳）『写真論―その社会的効用』（法政大学出版局、一九九〇）、三四一頁。

4) 荒川志津代・山下恒男「家族写真における子ども」『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学、芸術）』第47号、一九九八、一八二頁。



## 十八世紀ドイツの子どもの本(5)

クリスティアン・ゴットヒルフ・ザルツマン

### 『かにの本』

佐藤 茂樹

子は親を見て育つ

この辺で少し視点を変えて、今回は親に宛てた子どもの教育の本に目を向けてみましょう。取り上げるのは、クリスティアン・ゴットヒルフ・ザルツマン（一七四四—一八一二）の『かにの本 もしくは無思慮な子育ての手引き』（一七八〇）と題する本です。もともとは別のタイトルで出版されましたが、こちらのいわば愛称で読

者に親しまれるうちに、正式なタイトルとして表記されるようになったという経緯があります。それにしても『かにの本』とは奇妙なタイトルと思われる方も多いことでしょう。その名の由来は、小川に遊ぶ四匹の蟹の親子が扉絵に描かれていたことにあるのですが、さらにこの蟹の親子も元をただせばイソップの「蟹とその母」という寓話に遡ります。そっくり引用すると、教訓の付いたこんな話になります。



蟹のお母さんがその息子に「横這いをしてはいけませんよ、また脇腹をじめじめした岩にこすりつけてはいけませんよ。」へと言いました。と、その息子は「お母さん、教えていらっしやるあなたが真直ぐ歩いて下さい、そうしたらあなたを見てそうなりたと思うでしょう。」と言いました。

これは、人を非難するものは真直ぐ生き、また歩いて、そしてその時に同じようなことを教えるのが至当なことなのです。

(岩波文庫版『イソップ寓話集』山本光男訳)

ザルツマンは、この息子の言葉をラテン語で扉絵の下に引き、自分の本の銘にしています(ただし、へお母さんへをお父さんへにしてあるところは、啓蒙の時代に生きているこの著者の立場を象徴的に表しています)。この寓話のモットーを、子どもの感情や性格や行動を様々に損なってしまうエピソードに仕立てて、親たちの無思慮

や思い込みの顛末を訴える本、それがザルツマンの『かにの本』なのです。「皆さんの目にあまる子どもその欠点や悪癖が、皆さん自身でつけさせたものだったとしたならば、どういうことになるのでしょうか。……皆さんのほうであらかじめある欠点を与えておきながら、やがて子どもがそれをうまく覚えたからといって、そのために子どもに罰を加えようというのは残酷ではないでしょうか」という序言の一節は、この本の姿勢を明確に表すものと言えましょう。こうしてみると、『かにの本』



Christian Gotthilf Salzmann





というタイトルは、この本の内容とスタイルを短い言葉に集約して、とてもしっくりくるものと納得されるのではないだろうか。

### 逆説的な子育ての手引き

この本には三十六篇の子育ての「方法」が収録されていますが、そのすべてがマイナスの結末を持つ話に仕立てられています。言うなれば、この本は「子どもをだめにする」手引き書なのです。見出しを幾つか拾ってみま

しよう。

子どもが親を信用しないようにする方法

子どもに兄弟を憎ませ、しつとさせる方法

子どもが他人の不幸をよろこぶようにする方法

子どもの人間愛の心を枯らす方法

子どもに復讐心をいだかせる方法

子どもを芸術や科学から遠ざける方法

子どもをわがままにする方法

子どもをうそつきにする方法

子どもに人をそしる習慣をつけさせる方法

子どもを不平家にする方法

子どもを強情にする方法

向上の意欲をなくさせる方法

……

まさに反面教師の見本市といった観があります。そして例えば「子どもをうそつきにする方法」という見出し



の下には、さらに「子どものうそをおもしろがって、それをほめなさい」とか「子どものいうことを何もかも信用しなさい」とか「子どもが本当のことを白状したときに、罰を加えなさい」といった小見出しが続いて、幾つかのエピソードが語られます。

「子どもにきらわれる方法」のうち「子どもが『ひどいしうちだ』と思うようなことをしてやりなさい」という小見出しには、四つのエピソードが当てられています。が、その一話を要約して紹介しましょう――

ある女の子がきれいな花の咲いているのを見て、花束を作って母親を喜ばせたいと思い立ちます。そして勇んでそれを渡そうと駆けつけるのですが、気がせいっているせいでつまずいて転んで、大事な皿を割ってしまいます。動転してただ母親の名を呼ぶのが精一杯の子を待っていたのは、事情をたずねる言葉でもなければ、けがを慮る言葉でもなく、有無を言わさぬ頭ごなしの叱責でした。まして、事の発端となった気持ちなど汲み取れる気配はありません。女の子はその理不尽さに憤り、

「そうして、おかあさんのために花たばをつくってあげるといったやさしい考えは、二度とおこしませんでした。」

子どものときにこういう思いをした、親としてこういう対応をしてしまった、という経験を持つ人は多いのではないのでしょうか。しかも、子どものときに親にこういう思いをさせられながら、自分が親になったときには子どもにこういう対応をしてしまったという具合に、自分たちの体験を交互に繰り返しているのが実情かも知れません。

もうひとつ、子どもに芽生えた新鮮な外界への関心を摘み取ってしまう話を紹介しましょう。「子どもを芸術や科学から遠ざけてしまう方法」から「自然に対する子どもの興味を、できるだけわきへそらせなさい」というエピソードです――

街中に住むある男の子が、父親に初めて野原へ散歩に連れて行ってもらったときのことです。目にするものが何でも珍しく、せっせと父親のもとに持ってきては問い



ただなのですが、父親の方は面倒くさそうに、そんなことも知らないのかとか、気持ちが悪いから捨てるとか言うばかりです。道端のあれこれに興味を駆り立てられて、つい歩みが遅れがちになると、こらえ切れなくなつた父親はとうとう飲み物と食べ物で釣つて、この散歩を切り上げようと試みます。子どもはまんまとこの手に乗つてしまい、途中の一切に興味を失い、早く目的地に着いて約束の食べ物と飲み物にありつくことしか頭になくなつてしまいます。このやり方の成果は、絶大でした。大人になつてからは、散歩はどうでしたなどと聞かれる度に、道端のすべてを見過ごしにできなかった子どものときは対照的に、「きようは暑かつたですな。道が悪くつてね。ビールの味が格別でしたよ」としか答えない人になつてしまったのです。

こんな感じで、身につまされるエピソードが続きます。紹介しだすと限りがないのですが、「しきりに命令して、それが守られたかどうかは気にしないでいいさ」や「しきりにおどしつけて、そのおどしを実行しな

いようにしなさい」という項では、教育熱心のつもりが自分の言葉の後始末に無責任でいると、結局は人の言葉を軽んじて、世の中に対して高をくくつた子どもに育て上げてしまふ話などが語られることも付言しておきましよう。

エピソードはすべて、短くて一頁、長くて数頁の会話を含む物語に仕立てられています。著者の指針を一方的に説くのではなく、このように日常のひとつまの物語の形で訴えたところに、この本の構想の特徴を見ることが出来ます。読者も出来合いの処方箋を期待することは許されません。物語を通して気づかされ、考えさせられながら、自分で対処するしかありません。「なぜわたしは自分で子どもを病気にしたといわれるのだろうか。あれほど多くの不愉快な時間の原因となつてゐる子どもの不徳が、どうしてわたしの罪なのだろうか」と自問を重ねながら、事態をつぶさに点検するようになることが願ひだと序言にも述べられています。この本は本来大人に宛てたものでありながら、読んでゐるうちになぜか子ども



宛ての本だと思ってしまうのは、この構想と語り口の特徴のせいでしょう。具体的な出来事の衣を通して理性的な直観に到るというのは、十八世紀の多くの子どもの本に共通する考えであり、『道徳入門書』をはじめとするこの著者の多く子ども宛ての本も同様の構想で書かれているのです。

### 〈お化け〉の話はなぜ禁句か

この本のほとんどのエピソードは、二十一世紀に生きるわたしたちにも身近なものです。わがこととして思い当たる例も多いことでしょう。そうした中で、ここに取り上げられることがちよつと意外に感じられるものがありつあります。それは、へ子どもにお化けを見させる方法」という一節です。この「お化け」をめぐるテーマは、十八世紀には今日わたしたちが考える以上に深刻で、当時の代表的な児童書はほとんどこのテーマを取り上げています。子どもの教育は、この問題と正面から対峙しなければならなかったようです。

つまり、「お化け」の存在を信じ、暗闇を怖がるという問題は、単に個人的な性格の弱さ、臆病さでは済まされない悪徳と見なされていたということなのです。これは事態を直視し、物事の因果関係を理性的に把握できないから生じる欠陥であり、へ理性の自律」という当時の市民社会の最大の価値を揺るがすものと考えられていた節があります。この種の臆病こそ、幼少の頃から教育によつて正されなければならない欠陥なのです。以前に使った言葉を繰り返せば、その根絶は市民階級の将来にとつて「階級的な急務」であつたということになります。

例えば、前回取り上げた『新児童の友』には、「幽霊」と題する児童劇が収録されています。この劇では、へ化学的へ手際で幽霊の出現を仕組む悪童たち、引つかつて怖がる大人と子どもたち、それに幼少時からの啓蒙的教育のおかげであらゆる非合理的な出来事に怯まず立ち向かう子どもたち、の三者の攻防が描かれています。そこで強調されているのは、この種の臆病は胆力の問題ではないことなのです。大部隊を率いる豪胆な軍人が死



よりも幽霊が怖いと思う一方で、見かけに囚われずトリックをややすと見破るのはまだ小さい女の子の役割です。そしてそれができるのは、父親による理性的な教育の賜物だと語られます。こうした描写は、この一作にとどまりません。

今でこそ、たかが「お化け」と思いかもしれませんが、『かにの本』も意外にこんなところに十八世紀の著作という時代の刻印を帯びているわけです。

## ザルツマンの学校

ザルツマンは、イエーナ大学で神学を学んだ後、一七八八年にエアフルト近郊の町で牧師の職に就きます。一七八一年には、デッサウの汎愛学舎で典礼執行者と宗教の教師を務めます。『かにの本』の出版の翌年のことです。この学舎は汎愛主義的教育機関の嚆矢とも言えるもので、すでに紹介したカンペ、シュンメルをはじめとする十八世紀ドイツの教育の代表的人物たちが何らかの関わりを持ち、離反したり理念を継承したりしながら、独

自の道を開始する出発点としたところです。そしてザルツマンもここを経て、一七八五年にシュネッペンタールというところに学校を創設することになります。

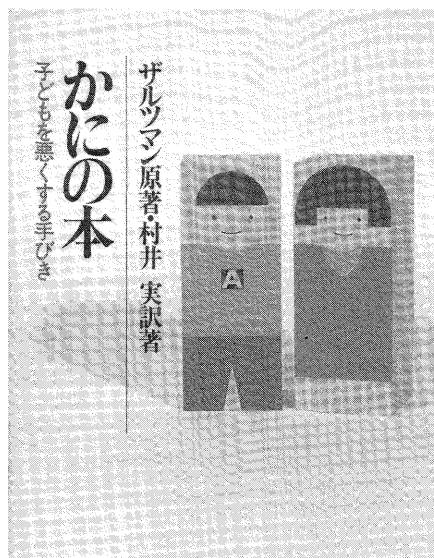
ザルツマンの学校の特徴的な点は、身体の鍛錬を重視したことです。前回取り上げた『新児童の友』にも、水浴の効用を論じ合う場面で、ザルツマンの学校での水浴に触れた箇所があります。それによると、暑い日盛りはもちろんのこと、雨の日やクリスマススの時期の水が張った池でも生徒たちが水浴をする様子が伝えられています。もちろんそれは日頃のたゆまぬ鍛錬の成果の驚嘆すべき例外として報告されてはいるのですが、それでも嫌がる生徒たちを強制的に水中に追いやるのではなく、むしろたつての願いを聞き入れてのことであると付け加えられています。このような取り上げられ方から見ても、すでに同時代の教育関係者の目にも、ザルツマンの学校教育は他と一線を画した特異なものと映っていたことは明らかです。この学校の生徒の中からは、後年、ドイツの体操の父とも称される人物さえ出ています。



## 日本に紹介された『かにの本』

ザルツマンは、日本の教育界でもわりと早い時期から知られており、この『かにの本』も明治三十七年には『我子の悪徳』という書名で紹介されたということです。

ちなみに、この『かにの本』はこれまでの連載で紹介した十八世紀の本のうち唯一日本語でほぼ全容を知りうる書物です。あすなろ書房という版元から教育学者の故



村井実氏の翻案（一九九七年二十三刷）で出版され、今でも容易に入手することができます。氏はこの本を単に翻訳してよしとするのではなく、原著の精神を尊重しながら、名前の表記や生活背景など様々な工夫を凝らして今日の日本の読者にも親しめる形にしています。十八世紀の書物を異なる時代の異なる文化背景を持つ読者に伝えるには、この方法はひとつの見識だとわたしは思います。この度のこの紹介でも、氏の用いた言葉をできるだけぎり利用させて頂きました。

氏の日本語版も、今のわたしたちには多少世相離れた感否めませんが、教育を論じた書物はこれくらいの違和感があった方がむしろよいのではないかとわたしなどには思えます。少なくとも、この本にハウ・トゥ的な即効性を求める勘違いはそれで避けられると思いますし、むしろ多少の違和感があればこそ、その内容と自分なりに対決して自分を取り巻く個別的な状況に即応させた生かし方もできるのではないのでしょうか。

（関東学院大学）



私が通った幼稚園・保育園(4)

幼稚園の思い出

福元 真由美

「ふたば みつばは すくすく そだつ……」、大好きだった幼稚園の園歌を今でもメロディーにのせて歌うことができる。わたしの通った幼稚園は、都心の町なかの神社の境内にあり、毎朝登園してくる子どもたちを大きな鳥居で迎えてくれた。幼稚園には三歳児一クラス、四歳児と五歳児がそれぞれ二クラスあり、外には大型の固定遊具のおかれた二

つのスペースと、境内の広場を利用した園庭があった。えんじ色でダブルボタンの園服につばのそり返った紺色の帽子（夏季は麦わら帽子）で登園するスタイルもかわいらしく、わたしも喜んで着ていたように思う。

幼稚園生活の思い出は、どれも断片的で、なぜこんなことを覚えているのだろうかとおかしくなっ



まうものも多い。梅雨の頃に雨が降ると、自分の保育室のある棟と離れにある一番広い遊戯室は、ビニールの円筒形のトンネルでつながれた。そこをくぐって集会や三歳児の保育室に遊びに行くのが、冒険みたいで面白かったこと。秋の運動会のおやつに出されるチョコチップ入りのスティックパンが、おいしくて大好きだったこと。冬に保健室で予防注射を受け、保育室にもどる廊下を「泣かない、泣かない」と自分に言い聞かせながら急いで歩いたこと。お弁当を保温庫にもっていく前に、いつも今日のお弁当は何か気になって、自分のロッカーの前でそーっとふたを開けて中を見ていたこと。

その他にも、誰かの吐いたものに気づかずクラスの女の子がその上を思いきり踏みつけた瞬間を見てひどく驚いたり、コーヒー牛乳を「コーヒーにゅうにゅう」という男の子に妙に幼さを感じたりした記憶がある。どれも四歳、五歳のわたしなりに園生

活を送っていた姿を思い起こさせるものであり、これまで自分の胸の中で大切にしてきた思い出だ。

このような思い出をたどっていくと、その後のわたしの学校生活につながっていった三つの経験にいきあたる。一つ目は、幼稚園の先生との関係についての経験、二つ目は先生から評価されるという経験、三つ目は自分の願いを実現させるという経験である。

一つ目の幼稚園の先生との関係についての経験は、わたしが四歳児クラスのとくに片足を捻挫したことと関係している。なぜ捻挫してしまったのかは覚えていないが、登園して下駄箱でうわ履きにはきかえる時に、包帯の巻かれた足に不便を感じていたことは確かだ。また、和式のトイレにもうまくしゃがめない状態のため、トイレで用をたす時には先生に介助をお願いすることになっていた。

けれども、一人でトイレに行くことが当たり前に

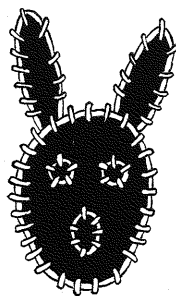


なっていたわたしには、先生にトイレの介助をお願いすることがなんだか気恥ずかしく、自分からお願ひすることができない。そんなわたしの様子を察してくれたのか、担任の先生はわたしをトイレに誘ひ、やさしく抱き上げて手助けをしてくれた。その抱きかかえてくれた先生の胸の温かさと、しっかりとわたしの足を支えてくれた腕の力強さが、わたしの心のつかえをとり除いて緊張した気持ちをほぐしてくれたように思う。さらに「この人には自分をゆだねても大丈夫……」、そんな先生への確かな信頼感を自分の思いとして確認することのできた出来事だった。

このような経験は、幼稚園を卒園してから小学校、中学校、高校にいたるまでのわたしの教師への信頼感の基礎になってくれたように思う。その教師を信頼する気持ちは、先生は自分を受け入れてくれているという思いに支えられたものだったと思う。

幼稚園の時のように自分の身を直接まかせるといふ方法ではなくとも、先生が自分を尊重してくれているということを感じることができたのかもしれない。

二つ目の先生から評価されるという経験は、絵を描くことと体で表現することの二つの活動における出来事だった。当時、クラスの一斉活動で描いた子どもたちの絵は、壁に飾られたあとに先生から評価の丸をもらってわたしたちの手元に帰ってきた。ある日のお帰りの時間に、先生が子どもたちの絵を返してくれることになり、一人ずつ名前を呼ばれて先生のところに行くことになった。自分の番になって先生





のところに行くと、絵の画用紙の裏面に先生が赤いサインペンで丸を書いてくれる。わたしは、サインペンがぐるりぐるりと回る様子を見ながら、「三重丸だいいいな……」と思っていた。経験的に丸の数の多い方が、「よくできました」という意味だということを知っていたのだろう。けれども、サインペンのペン先は丸を二つ描いただけで画用紙からはなれてしまった。「あーあ、二重丸か……、なんでかなあ……」という残念に思う気持ちと、なんだか釈然としない思いの混ざった感情を抱きながら、一人で保育室を出たのを覚えている。

もう一つの記憶は、これとは逆にほめられて嬉しかったという思い出である。お遊戯会で五歳児のわたしのクラスでは「かぐや姫」をやることになった。ひそかに「かぐや姫」役をやりたいかったのだが、わたしに割りあてられた役は「おばあさん」だった。少し残念だったが、出番もそれなりにあつ

たので気をとり直して練習に励んでいたように思う。ある日の練習で、かぐや姫が月に帰るところをおばあさんが見送る場面をやっていた時のことだ。先生が口を開いて「今ね、真由美ちゃんがこうやって（振りつけの身振りをそえながら）、かぐや姫が帰って寂しいっていうおばあさんの気持ちがよく出ていたよ」と、わたしを含む五人くらいのおばあさん役の女の子に言葉をかけた。

思いがけないほめ言葉に、わたしも最初は驚いた。それでも本当に嬉しくなってしまう、それで降の練習でも、もちろん本番でも、おばあさんの気持ちを考えながらいてねいに踊ろうと心がけた。特に先生がほめてくれたあの部分、帰ってしまうかぐや姫を見つめながら、視線を斜め上にして足をずらして座り、両手をついて上半身を二回上下する振りつけは、気持ちをこめて踊っていたように思う。

これらの二つの出来事は、表現の領域で評価され

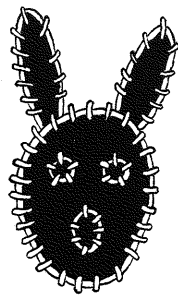


ることの戸惑いと喜びをわたしに印象づけるものになったと思われる。小学校に入学してからも図工の作品の評価は、よくても悪くてもその理由の理解できないことも多く困惑することもあった。よくない評価でも、その理由がわかれば改善につなげていくこともできたと思うが、残念ながらなかなかそうはいかなかった。一方で、自己表現の楽しさとそれが認められる嬉しさの重なった思い出は、人前で自分のアイデアやイメージを言葉や体で表現し、それを他の人と共有していこうとする経験を支えてくれた。表現としては稚拙であっても、自分の思いを受けとめてくれる相手がいると思えることが、今でも心強くわたしの背中を後押ししてくれている。

三つ目の自分の願いを実現させるという経験は、保育室の目の前の廊下にあった一台のオルガンがもたらしてくれた。自由遊びの時間、五歳児クラスの前オルガンでは、ピアノを習っている子どもたち

が指の練習をしたり曲を披露したりしていた。当時ピアノを習っていなかったわたしは、友だちの指が器用に動いてメロディーを奏でるのをとてもうらやましくみていたと思う。そのためか、オルガンを弾いている友だちがいると、その周りを囲むようにしてよくいたものだった。

そして、友だちの弾く「ねこふんじやった」の軽快な曲が、わたしに「オルガンを弾けるようになりたい」という願いを抱かせたのだろう。「ねこふんじやった」を奏でる友だちの指の動きをみつめて、それを覚えようとしていたり、オルガンのあいているときには、自分で弾いてみたりしていた。それでも、





なかなか早い指の動きや両腕がクロスされて演奏される部分などは難しく、気のいい友だちに教わることもあった。そのようにして、ついに自分一人で「ねこふんじやった」を弾けたときの喜びと満足感とはとても大きかったように思う。しばらくはオルガンでよくこの曲を弾いて、弾けるようになった嬉しさと楽しさを味わっていた覚えがある。

この経験は、小さかったわたしに一つの自信をつけさせてくれた。いま思えば、この時の自信は、次の三つのこと——自分の願いをかなえるために、努力してそれを実現させた自分に出会えたこと、ころよく弾き方を教えてくれた友だちの存在も大きく、仲間から教わることの大切さを知ったこと、学ぶことによつて夢や願いを実現できると知ったこと——に支えられていたのではないだろうか。そして、このような経験が、その後も学びを重ねていくわたしを励ましてきてくれたのだと思う。

幼稚園の思い出をふり返ると、その後の自分の姿に重なるものもあって、とても興味深い。小学校に入学した一年生の時には、よく休み時間にハーモニカを練習して担任の先生に聞いてもらっていた。音符の読めなかったわたしは、またもやピアノを習つて音符の読める友だちに「ド・レ・ミ・ファ」を教わつて、それを音符の下に書き込んで練習した。先生に聞いてもらえるのが嬉しく、少しドキドキしながら曲を吹いて、うまく演奏できるとシールがもらえるのも当時は喜んだ。わたし自身を受けとめて認めてくれる先生がいて、活動を支えてくれる友だちがいて、表現することを楽しんだり、成長遂げたことに満足したりする自分に出会つていく。このような大切な学びの芽を、わたしの幼稚園は「ふたばみつばは　すくすく　そだつ……」と、育ててくれたのだと今になって大きな感謝とともに思う。

(東京学芸大学)



特集 〈あまい〉

農の現場から『あまい』を考える

古谷 久美

我が家は、千葉で先祖代々稲作を続けている農家です。推定五百年前後受け継がれてきた田んぼには、昔から牛の糞や稲わらを完熟させた堆肥が入れられてきたようです。そして、そこで獲れるお米は、産地直送でお届けしている消費者の方々から「甘みがあつておいしい」と高い評価を頂い

ております。また、近隣の田んぼで作られているお米と比べても、客観的に測定される食味は高いようです。

同じような田んぼで同じように育ち、見た目も同じようだけれど、農作物は工業製品のように均一な仕上がりではなく、大変個性的なものといえ



ます。作物は正直ということでしょうか。

米作りでは種子の選定から始まり、それを育てていく環境のすべてが相互に絡み合い、トータル的においしいお米を実らせてくれます。

そして、その中でも大きなウエイトを占めるのが土作りではないかと私達は考えています。作物をおいしくするのは、土中の微生物といわれています。良質な堆肥を入れると、微生物はそこに含まれる有機質を食べ、ミネラル等の微量元素を放出します。この微量元素が稲の根を元気にし、お米がおいしくなる栄養素を根に与えると考えられています。作物が根を張り生長の為の養分を吸い上げる土は、手間隙かけて耕した分、作物の実りを豊かなものにしてくれます。我が家では、この大いなる土の力に感謝の思いを込めて「先祖代々の田んぼの底力」と呼んでいます。

我が家では野菜は作っていませんが、同じよう

に土作りにこだわる畑作仲間の作る野菜はやはり、一味違います。獲れたての新鮮な野菜の甘み、健康な野菜本来の濃厚な味が広がります。キャベツもトマトも人参も、スーパーで買うものと同じ野菜とは思えないほどの違いに驚きます。

スーパーの店頭に出るまでの時間を見越した早めの収穫、長い輸送時間、それをカバーするための添加物やコストの問題など、単純な素人考えからすると、物凄く無駄なことをしているように思われます。すぐそばの畑には旬の野菜がごろごろあるのに、我が家の近くのスーパーにさえも、遙か遠い産地の野菜がずらりと並んでいます。

今や商業主義の時流の中、本来は大量生産、大量流通に向かない食べ物までが工業製品並みに市場に出回り、コスト削減を余儀なくされ、ひいては環境面や健康面で様々な弊害が生まれてきてい





るように思われます。そんな中、ここにきて「ちよつと待った!」「何かおかしいぞ!」と声があがるようになりました。

最近『地産地消』（『地元で獲れた物を地元で食べる』）という言葉をよく耳にします。昔から我が国に伝わる『身土不二』（『人の命と健康は人が住む土と共にある』）に通じる言葉です。全国の行政や農協、第三セクターが運営する直売所や農産加工場、学校給食の現場で地場農産物の取扱量が着実に増えてきているようです。私達の命と健康を守る食について少しずつ、新しいうねりが広がろうとしているのを感じます。

都会暮らしの方々にとっては、住む土地の農作物は無理な話ですが、なるべくなら気候、風土の似た近県のことを、それが無理ならせめて国産のものを選んで頂きたい、家族の為においしくて安全という食本来の大前提を持つ農産物を選んで頂きたい。信頼できる産直ネットでも、個人の産直でも、作り手の顔が見え、こだわりの伝わる農産物を、可能な限り選んで頂きたいと願います。

と、ここまでつらつらと思いを巡らしていたところ、田んぼ仕事を終えた夫が、日に焼けた顔と泥だらけの作業着で戻って来ました。

私が「ねえ、農作物を育てている立場から『あまい』というテーマで何かある?」と声をかけると、ざぶざぶと手を洗いながらの第一声が「米や野菜があまいだのまずいだの、暢気なこと言ってる場合じゃないぞ。あまいのは消費者だ!」



と手厳しい言葉。

現在四十三才の夫は、この地域の農家の中では最年少です。主力は五十代、六十代で、どの家も次代の担い手はなく、今ある田んぼや畑が消えていくのは時間の問題です。日本の農業が紛れもなく、刻一刻と衰退していくのを夫は日々、肌で感じています。我が国の食糧自給率は、四〇パーセントそこそこ先進国の中でも最低の割合です。

そのことに、もっと危機意識を持つて欲しいと夫は言います。

まだ、記憶に新しい平成五年の大凶作の年、我が国はたくさんの外米を輸入しました。しかし、お金さえあればいつでも食糧が集められるのでしょうか。天災、人災、急激な人口増加、政治上の問題など、世界がこの先、いつどうなっていくのか、何一つ保証はないわけです。ご飯が食べられなければパンや麺類があるじゃないなんて、あ

まいこと言うなよ、と夫。小麦だつて手に入らなくなるかも知れません。

何でも、もの作りが一番大変、ものがあつてこそ、それを仕入れて能書き付けて売ることができ。農業に対して、「大変ですね」「頑張つて下さい」と、うわべだけ言つてあまい認識でいると、本当に取り返しのないことになるぞというわけです。

農業が第一次産業と言われる所以は、人間の命と健康を支える根っこの産業だからだと私達は考えています。この土台がぐらつて、何の二次、三次かという自負を私達は持っています。

今のこの時流の中、できることから実践の輪を広げ、日本の農業を守つていくうねりを確かなものにしていきたい、『あまい』というテーマから発信する千葉の一農家の切実な思いです。

(千葉・セイダイ農場)



# 通りすがりの「あまーい」出来事

松沢 孝博

行事協力の依頼を受けて度々保育所を訪れていた。打ち合わせも終わり、帰りかけようとした時、砂場にそれぞれ二つの器を持ちながらニコニコおしゃべりしている二人の女の子が窓越しに目に入った。Y子とK子である。Y子は昨日たまたま私に印象を残していた子どもであった。何が

始まっているかは分からなかったが、丁度二人が砂場に腰を下ろそうとしたところである。私は場所を移し、少し離れたところから二人の遊びに惹き付けられてしまう。実に楽しそうにY子とK子は砂遊びをしているが、どうもキーキ屋さんごっこをしているようである。K子は器に砂を入れて



上から何度もたたき、それを皿の上に逆さまにして形を作り「おいしいケーキです、どうぞ」といってY子に差し出している。Y子は「ありがとう」と言つて両手で大事そうに口に持つていき、「あまーい！　おいしい。ママありがとう」と言う。K子が間髪を入れず「違うよ、K子はケーキ屋さんだよ」という。Y子は「あつ、そうか！」と言いながら皿をゆっくり砂場の縁の上に置く。そして今度はY子が形の違った器に砂を入れてそれに少しの水を加えて更に砂に加えて、「新しいケーキ」と言いながら作っている。Y子は器から砂を出さずにその器ごとK子に差し出し、「はい、新しい、おいしいケーキです、どうぞ」と言う。K子は「ありがとう。おいしいねー！」と応え、二人で笑い合っている。実に平和そうであり、柔らかな日差しのもと私自身の気持ちも和み、帰る

ことを忘れていた。

帰りの道すがら、子どもたちの楽しさの余韻に浸りながらも、ケーキ屋さんとしてのやりとりが、お母さんとのやりとりの世界へ変わったのは、こういうことだろうと考えていたところ、昨日のY子のことが思い出されてきた。

前日の出来事。ぼつぼつお母さんが迎えに来始めている。Y子は目ざとく園庭の端にある門から入ってくるお母さんを見つけ、お母さんのもとに駆け寄り泣きじゃくっていた。お母さんが驚きながら「どうしたの？」とたずねると、Y子は小さい声で「ブランコでできなかった」と訴えている。それまで泣き顔を見せてもいなかったたので、たま側側にいた私も驚く。お母さんは「そうなの」と言いながらブランコにチャラツと目をやる。ブランコは帰りの迎えを待っている子どもたちで占領





されている。「それじゃ明日ブランコしよう」そこへY子の荷物を持った担任も来て「今日、ブランコ乗れなかったね。あしたは乗ろうね、Y子ちゃん。おかあさん、さつき乗リたかった時にお友達がブランコに殺到して乗れなかったらしいのです」と伝える。Y子の泣き声は小さくなっているが、依然としてお母さんのスカートに顔を埋めている。お母さんは「そうですか。そういうこともあるでしょう。Y子ちゃん、ブランコは明日もあるからね。明日乗ろうね。先生ありがとうございました」と言い、Y子を小脇に抱えるよう

にして家路につく。Y子はお母さんのスカートに顔を埋めながら右の手だけを担任に向けてバイバイをしている。担任も「明日乗ろうね、Y子ちゃんまた明日。バイバイ」と対応してクラスに戻る。お母さんは門を出たところで、膝を下ろしてY子に「そうだ、お家の近くの公園で一一緒にブランコ乗ろう!」と言っている。Y子はお母さんの顔を見ながら機嫌を直したようにして「うん!乗ろう!」と応えている。そして、お母さんとY子は手をつないで帰っていく。足取りもすっきり変わっていた。

お母さんはY子に帰ることを急かせることもなく、また我慢や説得を強いることもない。そして誰かを非難することもなく、ただY子の気持ちに沿い、Y子の気持ちに答えようとしていることに私は感心したのである。このあとY子がお母さん



と一緒に過ごす中で癒されて気持ちを立て直すことができることを願う一方で、すっかり気持ちを取り戻し、明日もいつもと変わらぬY子であるだろうと確信に近い思いをも抱いたのである。

たまたま目にした二つの出来事は親と子どものかかわりを考えさせてくれた。不安や寂しさなど幼い子どもにとって危急存亡の時もお母さんによって癒されているのであろう日頃のお母さんとY子の信頼のある関係や平和な関係が想像された。ケーキ屋さんからお母さんとの世界に変化したのも、それくらいY子にとって、ケーキの甘さやおいしさよりお母さんとの関係の方が勝っているのだろう。「甘い、おいしい、ママありがとう」はケーキの甘さ、おいしさを表現したのであろうが、ケーキより甘い嬉しいお母さんとの日常

的なかわりが表現されたようにも感じられたのである。

このような光景はあまりにも日常的であり、通りすがりの光景でもあるにもかかわらず、二つの出来事が時間経過とともに焼き付いたのである。

幼稚園や保育所を訪れて話題になるのは、困ったと表現された子どもたちへの対応の問題、親の問題、親子の問題が非常に多い。また、昨今の殺伐とした親子関係や子どもがおとなによって犠牲になることを見聞きするなかで、私自身が子どもの平和な穏やかな、そして楽しい姿に触れることを求めているのかもしれない。その思いだけが先走らなければいいのだが。

(国立音楽大学)



# 読みが甘いか

前田 峰子

公立中学校でスクールカウンセラーとして働き始めて八年になる。初めの頃、未知の世界に足を踏み入れる不安に悩まされた。すでに二十年近く児童相談所で心理判定員の仕事をしてきたので、どれほど重度障害の人に出会っても慌てふためかない気持ちの準備はできているつもりだったが、学校に訪問者ではなくスタッフの一人として入った時、双方の違和感はかなりのものであった。学校

の管理者側は当時の文部省のスクールカウンセラー配置事業案に積極的に手を挙げ、私が赴任するとすぐスクールカウンセラー活用調査委員会を立ち上げて毎月一回集まりを持ち、校内の相談活動について話しあうことになった。しかし学校全体ではそこはかとなない不信感が漂っていた。研究会で出会った先生から笑いながら「まさか文部省のスパイじゃないでしょうね」と言われたこ



ともある。相談の申込は担任を通してという相談室運用規定の項目を、相談者自身直接にあるいは相談専用電話で申し込むことに変えるのにも、かなりの抵抗があった。自分が受け持っている生徒が相談室に行くような悩みを抱えているなら担任として知っていなくては困るという理由であった。確かに同じ学級の生徒が二、三人でよくちょく相談室に出入りする時は、担任かあるいは特定の先生の授業が面白くない・分らないと訴えることが多く、学級崩壊の前触れのこともある。

また同じ学級で不登校生徒が複数以上の時、担任のコミュニケーション力に問題がないかどうか。授業も部活動も熱心で生徒の家庭にも度々訪問している先生が毎年不登校生徒を四、五人も抱え、でも相談室には一度も見えず、保護者にも相談を勧める気配もなかったので、ある時欠席日数

が三十日以上の子の生徒の保護者宛てに、相談室でお茶飲み会を開きますという案内状を作り、その先生の机上に六通乗せて置きました。他の先生方には、私が「お茶を飲みながら愚痴でもこぼせたら保護者の方たちも少しほっとされるのでは？」と思いましたので」と伝えると納得されて各々の家庭に届けて下さり、出席者の人数は多くはないが大変好評で以来毎年開いているが、前述の先生だけは二通は届けるが後は無駄と突き返された。私は四通に住所を書き切手を貼って投函した。翌週一人の保護者から電話が入り、学校からなんの連絡もなく孤独だった。声をかけてもらって有り難かった。ぜひこの集まりには参加させてほしいとのこと。後日、保護者の集まりに参加されたこの方の子どもは小学校の三年生から担任とうまがあわず登校を渋るようになった。すると担任が毎朝





室への登校という方法もあることを伝えたが父が教室に入らなくては駄目だと反対して登校再開には至らなかった。

出勤途中立ち寄って自分の車に乗せていくからと言って玄関で待っているが、子どもはトイレに駆け込んで出てこない。仕方がないので先生に謝り先に行って下さいということを繰り返すうち私も疲れてきて子どもが疲れて行きたくない気持ちに分かったので、思い切って先生にお断りしたら以後全く音信不通で、多分小学校から中学校に、関わりを断った家庭というような連絡が入っているのではないか。私も夫の両親から母親がしっかりしないから大事な跡継ぎが不登校になったと責められていると泣かれた。この方にも一応保健相談

しかし翌年の集まりでは参加した母親の二人が子どもを保健相談室に通わせたいと言われ、四月の新学期には五名が登録。一人は一週間続かず長期欠席に戻ったが、他の生徒は遅刻したり休んだりしながらも仲間ができることで元気を取り戻す生徒もあり、あまりに保健相談室が賑やかなので職員室では早く教室に戻すべきだという声も出たり、一方担任の中にはかなり批判的な意見を述べていた人が自分の受け持ちの生徒に欠席が増える と保健相談室を勧めるようになったりで、最終的には十一人が登録し、二人はこども不登校で一年過ぎた。夏休み以降は人数が多すぎて週に一日の私の勤務では個別に話を聞く時間が取りにくいこ



とと保健相談室の中でも、いじめや仲間はずれの問題が出てきたので、相談室グループカウンセリングを始めた。小学校以来の不登校では学力の遅れも勿論気にかかるが、苛められたと不登校になった生徒が小学校では苛める側だったという例も少なくなく、自我発達を促すにはどんな方法が

有効かということも常に頭の角にあったので、試みに他人の話を聞くこと・自分の考えを相手に伝えることだけを枠組みにし、テーマはその日、誰かが話したいと思ったことを話題にする。人数は二人から六人で、三年生の一人は両親の問題で一年の途中から不登校になり、親や親戚からいい高校に入れと言われて、しきりに偏差値にこだわっていたが、毎回一番先に登校して他の生徒が来るまでの間、個別にその悩みを聞いているうちに入試の前日には自分の力で入れる高校で頑張ること

が大事なことだと自分で結論を出し、無事に入学できた。グループカウンセリングでは、個別面接ではとても深入りできないような個々の家庭の具体的な生活実態も話の中で語られ、生徒の一人ひとりを理解するのにとっても大事なヒントを与えられたように思う。

教育も短期に成果をとという声が大きいが、育てる“ことの基本は毎日の細かいことを倦まず弛まず積み重ねていくことではないかと私は思っているが、実際には最も受け入れられない提案の一つである。促成栽培的教育法が人気のある時代、その副作用とも考えられるトラブルが増えている今日、子どもの育ちで困ったことが起きた時には生活の基本を見直すというのは読みが甘すぎるだろうか。

(公立中学校スクールカウンセラー)



## 自閉症児Aさんの場合

大蔵 みどり

私は知的障害養護学校の小学部で教師をしている。「甘い」というテーマをいただいてまず思い浮かんだのは、私が以前担任していたAさんのことである。

当時六年生だったAさんはよく私におんぶされたり抱っこされたり、布団にもぐって抱き合うこともあった。また、活動の途中で退室しようとすることに對しても、他の児童に比べて例外的に許

容していた。そして悪いことをしても教師が怒声を上げるとは殆んどなかった。一方でAさんは体格は大人並み。運動能力も良く、手先も器用。言葉が話せ、読み書きもでき、本校では知的に高い方のお子さんであった。恐らくはそのギャップのせいもあるだろう。事情をあまり詳しくは知らない教師から「甘いんじゃないの?」と言われることがあった。ましてや他の保護者は皆そう思っ



ていただろうと思う。その上、Aさんを元、担任したこともあり、時々臨時で付いてもらうことのあるB教諭からも「六年生だし、もう少しちゃんとさせた方がいいんじゃないかな。ぼくとだともっとちゃんとやるよ」と言われてしまい、八〇パーセントくらいは自分はこれで良いと思いつつも、悩む部分もあり、私はたびたび参考書（後注）を読み返しては、考えていた。

Aさんは自閉症であり、かつ行動障害のあるお子さんであった。自傷、他傷、破壊などの困った行動が顕著であったが、その克服に努力してきた結果、ずいぶん良くなった。主たる直接的な原因は注目要求だった。教師に「コラッ！」と言って追いかけれ、ギョツと「つかまえた」をしてもらいたいがために、悪いことを次々覚えてしまったのである。まずその原因を掴んだ私たちは、そういうきっかけには応じないこと、代わりに「まてまてつかまえた」遊びをたくさんやって

あげ、「まてまてする」と本人が言葉で要求すればいつでも応じてあげてくれることを理解させた。その後、言葉で要求する力が伸び、多少嫌なことでもがんばったら物心共にごほうびが与えられるよということも理解して、最も苦手だった式、行事への参加も可能になってきた。

そんなすばらしい成長を遂げてきたAさんではあったが、依然として「私だけを見ていて！」というアピールが強く、見つめた目をそらさないこと、スキンシップや言語反復による頻繁な愛情確認、ギョツと強く抱きしめることを求めてきた。そして、時々怒って怖いB教諭の前ではおりこうにしているが、五年間に亘って毎日つきあってきた唯一の同性教師である私にはすごく甘えてくるし、あまりがんばってもくれなかった。そこをもう少しがんばってよ、と要求しすぎると、困った行動をチラッチラッと出してきた。さらには六年生になってから、家庭内で暴れ、家具を壊したり





母親に暴力を振るったりする問題が生じてきた。

これはもしかしたら、「ついに六年生」ということで学校でも家庭でも、Aさんに対し急に要求が高くなった(例えばそれまでは朝の会はプログラム二番まで着席すれば、後はリラックスコーナーに行ってもよいことにしていたのを、終わりの挨拶まで着席させようとした)ことが原因だったかもしれない。

私がAさんに対し、「甘い」と思われる対応をしていたのにはそういった背景があるのである。強い自閉性を持つ子どもを社会適応させようとして厳しい指導をしすぎると、さまざまな行動障害を生じやすい。一度獲得してしまった問題行動、

とりわけ他傷は自閉症からくる一次的な不適応よりも一層深刻であり克服も困難である。

Aさんが何故そんなに抱きしめてもらいたかったのか、それははっきりとはわからないが、Aさんには時々、「嫌悪記憶のフラッシュバック」(詳しくは後注の参考文献等を参照されたい)というようなことがあった。例えばある日も、私が椅子を移動しようとしてAさんの目の前で高く持ち上げると、突然恐怖の表情とともに防衛姿勢を取った。またAさんは大人の怒声や他児の泣き声でも不安定になり、ストレスの度合いによつてはパニックになることもあった。一般的に、自傷、他傷、破壊といった行動障害の背景には、暴力を受けたたり、観察したり、あるいはすつかりまかり通る状況があったかが考えられるという(後注書より)。恐らくAさんの生育史の中にもそんな辛い体験があつたのだろう。

あるいは理由是他にあるのかもしれない。いず



れにせよAさんは、私に強く抱きしめてもらいた  
がったことはまちがいない。不安定やパニックに  
陥った時には、「大丈夫だよ」と優しく言って背  
中をギュッと抱きしめてあげることが有効であつ  
たこともまちがいない。それならば理由の真相な  
んで、どうでもいいじゃないか。Aさんは求めて  
いたんだ。ましてやAさんは自閉症。対人関係の  
障害である。

どこまでがんばらせるのか、についても、立派  
な中学生になるには一体何をどこまでがんばら  
ないといけないというのだろうか。早い話が、集  
団行動が取れる、おとなしく座っていられること  
が求められているわけだが、それが難しいのが自  
閉症であり、難しいからこそ養護学校に來ている  
わけである。一步でも二歩でも、いわゆる健全者  
に近づけようという発想は私には全くない。とに  
かく自閉症児にとって生きにくいこの社会と、な  
んとか折り合いを付けて、心安らかな一生を送っ

てはしたいと願う。そのために一体、本当は何をど  
こまでがんばらせる必要があつたのだろうか。

保護者からは、とかく「優しい」教師よりも  
「厳しい」教師の方が支持されやすい。しかし私  
は「甘いんじゃないの?」と評価されようが、子  
どもの心を理解しようとする優しい教師でありた  
い。

(筑波大学附属大塚養護学校)

# 注 参考文献

小林重雄他編著『自閉症障害の理解と援助』コレール  
社、二〇〇三

長畑正道編著『行動障害の理解と援助』コレール社、  
二〇〇〇



# だけの幼稚園とラジオのおっちゃん(6)

しょうごもり  
庄籠

道子

## 「がち！」の巻

朝、みんな次々に幼稚園に来る。ももきもおばあちゃんにつれられて来た。ほかの子達は先生が「おはよう」と言う「おはよう」と返すが、ももきだけは絶対言わない。おばあちゃんが

「ほら、ももき、『おはよう』言わな」

と、いくら言っても言わない。しかつてもくすぐつても言わない。「おはよう」と言うと、にやつと少し口のはしを動かすので、それがあいさつなんだろうということにしてある。

幼稚園で全然しゃべらないかというところではなくて、黙ってくつをきはかえてるなと思ったら、突然

「けむし！」

と叫んで走り出す。「きのう、かにがおったで」と話もしてくれる。

今朝も、いちおう

「ももきくん、おはよう」

と、竹田園長先生が言った。ももきは、もちろん「おはよう」は言わなかったが、突然、先生の前に手を出して言った。

「がち！」

え？ がち？ 竹田園長先生も籠先生も三人組も、差し出されたももきの手の平にのっかっている



ものを見た。かきの実だった。まだ緑色の小さなかきの実。花の後に落ちてしまったやつをひろったんだね。小さいけど、緑色だけど、確にかきの実。それが言いたくて見せてくれてるらしい。

「ほんまや。小さいけど、かきやねえ」

「うん」

その後、先生達がこっそり話しているのを三人組は聞き逃さなかった。

『かき』が『かち』なら、『ももき』は『ももち』やろかねえ」

「そうやねえ」

「いっぺん、ために呼んでみよ」

竹田園長先生は、

「ももち」

と呼んでみた。ももきは「ん？」とふりむいた。たつやも呼んでみた

「ももち」

「ん？」

ももきはやっぱりふりむいた。疑問にも不満にも思っていないようだ。その日から、ももきはももちと呼ばれるようになった。

「先生、おっちゃんが手紙、持っとおで」

りょうたが知らせに来た。ラジオのおっちゃんハポストが大好き。保育所に行ったら保育所のポスト、幼稚園に来たら幼稚園のポストを必ず見る。そして、中に手紙が入っていたら、持ってきてくれる。

きょうも、持っ

てきてくれた。

「もらっというて」

竹田園長先生が

りょうたに言った。

「おっちゃん、あ





りがとう」

りようたが手を出した。

ところが、おっちゃん

「む」

って怒ったような声を出して手紙をひっこめた。

## 「心をいやすももち」の巻

二、三日雨が続いた。雨の日にはラジオのおっ  
ちゃんは来ない。

「しばらくおっちゃん、見ないねー」

「ほんまや。なんか、さびしいな」

そんなことを話していた午後だった。まだ雨は  
降っている。おっちゃんが現れた。長ぐつをはいて  
る。へー、長ぐつをはいたおっちゃん、初めて見た  
わ。そして、なんと、花柄の傘をさしている。

「おっちゃん、きれいな傘やねー」

「先生、くれへん」

あわてて籠先生がもらいにいった。おっちゃん  
は、すつと渡してくれた。大切な手紙だ、子どもに  
は渡せないと思っているらしい。なんでぼくじゃあ  
かんねん。りようたは不満である。

竹田園長先生が声をかけると、おっちゃんは

「おっ！」

と、軽く傘を上げて、うれしそうにつこり笑って  
歩いていった。

お昼ごはんの時間になった。きょうは、おかず給  
食の日だ。パン給食の日はパンと牛乳。お弁当の日  
は、家から持ってきたお弁当。おかず給食の日は、  
家からごはんだけ持ってくる。おかずはおかず屋さ



んが配達してくれる。

たかよはおかず給食がきらいだった。がんもどきとか、かぼちゃの炊いたのとか、きらいなものが必ず入ってるんだもの。「一口だけは食べてみなさい」

「いや!」と、いつも先生とけんかになる。

ももちもきらいだった。ももちは、かまぼことかてんぷらとかこんにやくがきらいだった。ちくわもきらい。「じゃあ、おでんはきらいなんやね」と先生が言う。じゃがいもとたまご、食べるからいいもん。あ、きょうのおかずにも糸こんにやくが入ってる。ももちはゆううつな顔をした。

かしちゃん。

「先生、おはし、落とした」

「洗っておいで」

おはしを落とした人は洗ってくる。ももちもよく落とす。

ももちは、おはしを落とすと、部屋の中にも水道

はあるけど、廊下の水道まで洗いに行く。なかなか帰ってこない。やっと帰ってきて食べはじめたかと思うと、ぼろん、またおはしが落ちる。また、廊下

に洗いに行ってなかなか戻ってこない。

糸こんにやくがいやなんやな。それにしてもえらい時間かかるな。何しとんやろ。たつやがこっそり後をつけた。籠先生もついてきた。

ももちは、廊下の水道でおはしを洗う。目の前の鏡の自分の顔に気がつく。「いー」とか「べー」とか、いろいろしてみる。水道を離れる。たらいが目につく。ざりがに、どうしてるかな。しばらく見る。部屋に帰ろうとする。あ、飼育ケース。毛虫たち、元気かな。じーと見る。さて、ごはん食べるんやったな。

「もちくんは廊下で心を癒してるみたいです」

籠先生が竹田園長先生に報告した。

(保育研究グループ はるにれ)



# くぐるじや

吉岡 晶子

先日見た映画の中に、面白いシーンがあった。山奥の湖に浮かぶ小さな御堂、中はワンルーム。その中には、仏様が祀ってある宗教的空間と、布団を敷いて寝起きする生活空間があり、部屋の真ん中あたりに唐突にある扉が空間を区切っている。同じ部屋の中なのに、その扉を通して二つの空間を行き来

して生活が営まれている。まるで幼稚園のおままごとのような造りになっていた。そこに、つましく暮らす年老いた僧侶と小さな少年がいる。少年は、朝起きて布団から出ると、わざわざ扉を開けてくぐり、同じ室内の聖なる空間に行き、仏様の前でお勤めをする。ところがこの少年がやってはいけないこと、



ちよつと後ろめたいことをしたときには、この扉を通らずに横から行き来したのである。

日頃の子どもの姿にも、くぐったり、通りぬけたり、のぞいたりするようなことはたくさんあり、その時の気持ち、心持ちが表れていることがよくある。

### じゃがいもやさんのおきやくさま

昨年、年長児が「じゃがいもやさん」をやることにした。自分たちが掘ってきたじゃがいもを茹でて、幼稚園中のみんなにご馳走したのである。じゃがいもが茹で上がり、園庭に会場設営。木陰にテーブルセッティングをし、看板をつけた入り口も用意した。この入り口はトンネルのような形のアーチ型でみんなからよく見えるところに置いた。いよいよご招待。まずは年少さんから。前日配ったチケットを持って入り口に並び、アーチをくぐってお店に来

てくれた。その時、保育施設の小さい子どもたちもお招きした。手を引かれてよちよちやってきた小さな人たち。年長児は腰をかがめて声をかけ、案内しようとしている。小さくても、アーチの入り口をスーッとくぐりぬける子もいたが、なかにはどうしても足が止まってしまい、くぐれない子がいた。先生が声を掛けても、手をとつても駄目、後ろに下がってしまうのである。結局アーチから離れたところからじゃがいもやさんに入り、テーブルにつくことになった。

すっかり仕切られなくともほんのちよつと区切り、仕切りがあるだけで、そこは異空間になり、未知の世界になるのだろう。うきうきとくぐる子もいれば、この子のように不安になることもあるのだろう。違う空間に入ること、越えることはその子なりのエネルギーの要ることなんだということをこの場面であらためて感じた。



## 外に出るんや

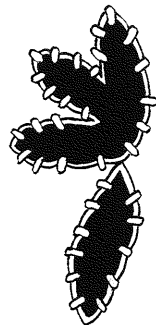
今年担任している三歳児の入園当初のことである。H子はむっつり黙っていて緊張感がからだ全体から伝わっていた。でも表情には意志の強さが表れていた。ある天気の良い気持ちのよい日、多くの子どもたちが園庭に出ているとき、H子は部屋から外への出入り口の敷居のところに立ってジーッと外を見ていた。「お外に行く？」と誘ってみたが動かない。手をとってみたが、敷居のところに爪先立ちをして一歩前へは出なかった。その足元に気持ちが表れていた。今はまだ敷居の手前のほうが安心なのだろうと思い、そこにいられるようにそーっと私はその場を離れた。

ある日、私が外に出ようとする、H子は絵本を持ってきて「読んで」と言った。H子が直接関わって言葉をかけてきたので、ぜひ応えてあげたいと

思った。片手は外に引っぱられているが、ここはなんとかしなければと、敷居のところに座って絵本を読むことにした。H子は椅子を持ってきて座り、少し後ろから私の肩越しに見ていた。何人か集まってきた楽しい雰囲気になった。一冊読み終わると、H子は「これも」と本を持ってきて、H子が選んだ本を数冊読むことになった。

数日後、H子はなんのこともなく、いつのまにか外に出て砂場で遊んでいた。小さいなりに自分でふんざりをつけ、新しい空間へと一歩踏み出したH子。

H子にとっては敷居の向こうはまだ未知の世界、そう簡単には行けないところだったのだろう。未知の世界に向かうときの不安や緊張感を乗り越えて通り





ぬける時、そのきっかけはちょっとしたしたことかもしれないが、区切りの敷居のところで過ごした時間は大切な時間だったのだろう。

さえぎるものの無い広い空間は、開放感があってとても気持ちがいい。でも、空間に何も無いときと間に何かあるときでは、あるほうがむしろその先、向こう側を感じる。向こうに何かがあるのだろう、どうなっているのだろうとイメージをくすぐられる気がする。見えていても見えないような……。

普段の遊びの中で、子どもたちはなにげなく自然にいろいろな空間を行き来しているように見える。でも、異空間の雰囲気や空気を感じて空間を越えることは、深呼吸して「えいやっ」と気合を入れることでもあるのだろう。踏みとどまったままでなく、勇気を出して越えていって欲しい。感じ方、表し方は人それぞれであろうが、小さな子や日子のようなちよつとしたとまどい、感じることは、ビクビクす

るということではなく、場の空気を感じる大きな感覚ではないだろうか。どうしようか、行こうかやめようか、気持ちがふれること、揺れていること、迷っていることを察知し、揺れていることを認めてあげること、乗り越えることを支え保障することが私たちの役目なのだろう。

### シンボルとなつたアーチ

昨年、生活を進める中で、みんなの象徴、シンボルとなるアーチが登場し、一年間アーチをくぐりながら世界を広げてきた。

### 四月 始業式。先生たちが遊戯室の入り口に並

んで花道を作ってくれた。そこを通るときは嬉しそう、はざかしそう、ちよつと緊張した表情。通りぬけると年長だけの始業式。いつもと空気が違う



気がしてぐーんと大きくなった気分。  
きょうから年長だ！ 嬉しそうだつた。

五月 園庭での“遊園地ごっこ”。入り口を作

るのに苦労した。棒を立てて看板を下げてチケット売り場にしましたが、すぐに倒れてしまう。椅子を置いたり机を並べたりしてなんとか入り口らしくしたが、修理に追われてしまった。でも、年少、年中さんはちゃんとそこを通ってくれた。

六月 “じゃがいもや”。遊園地ごっこの体験

を生かし、今度は倒れにくいように、土台のアーチは木製。この土台は、これまでは大人が必要に応じて利用していたものだったが、これに“じゃがいもや”と看板をつけて入り口にした。園庭のど真



ん中にどーんとアーチを置いてみんなをご招待。チケット係、案内係がここに並びせつせと接客。長い行列ができ、それがますます張り切らせてくれた。  
このアーチが卒業までみんなのシンボルとなった。

十月 運動会。入場門をアーチで作った。年長

全員が描いた絵を貼り、みんなの力の結集。くぐり抜けるとそこは晴れの舞台。綱引きもリレーもここから颯爽と入場した。緊張感があった。退場したときは、ホッとした安堵感で顔がほころんだり、



友だちと手を取り合ったりした。

十一月 クリスマス。どんな飾りにしようか

……。なにか大きな活動にみんなを取り組もうとするときいつも中心にあったアーチがここでも活躍。茶色だったアーチを緑色に塗り替え、それぞれが作ったクリスマス飾りでデコレーション。遊戯室に飾り、キラキラ輝くイルミネーションも加えた。

十二月 “図書館ごっこ”。絵本作りから始まり

図書館へと広がった遊びのときもアーチが活躍した。そこを抜けると中は図書館。本棚があり、手作りの本が並んでいる。異次元の世界があった。

三月 いよいよ卒業。時間をかけて作っていた

一人ひとりの手作りの小さな織物を全員分飾り付けた。卒業の日、そのアーチをくぐってみんな新しい世界に羽ばたいていった。

子どもたちはいろいろな物事をくぐりぬけて大きくなっていく。スーッと通れるとき、後戻りしなくなる。迷路に迷い込んでしまったとき、一人で通れないときは友だちと一緒にいることもあるだろう。行ったり来たりもするかもしれない。迷ってもいい、時間がかかってもいい、そのときはむしろ貴重な体験をしている。とまどったり、迷ったり、つまずいたりする姿をしつかり捉え、くぐりぬけられるよう支えたい。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）



# 編集後記

「にんげんは進歩しているのだろうか」。子どもが犠牲になる事件が報道されるたびに、素朴な思いが込み上げます。八月号で掲載された本田和子先生のご講演の「子ども嫌いの時代」という言葉も、悲しいけれど納得してしまいました。

\*

大学時代を共にした遠藤めぐみさんから、自作の詩集『こいぬののぶちゃん』（私家版）が届きました。そのあとがきに、「児童学科で、わたしたちは、幼いひとたちが幸せに生きているように、ということを学びました。つまり、男も女も、障碍のあるひと、お年寄り

も、すべてのにんげんがあかるく、おだやかな、やさしい気持ちで暮らせる世の中にしましょう、という希望です。この作品は、そんな苗床から生まれました。」とありました。彼女が自分の中で大切にできたことを言葉にしてもらえたことに感謝の気持ちでいっぱいになり「わたしは」ではなく「わたしたちが」と記されていることに、彼女の優しさを思いました。

\*

『児童学からの出発』が始まりました。首藤先生が、主旨を書いてくださいましたが、様々な活動を読者の皆さんとも共有し、子どもたちの幸せにつなげられたら、と思います。嘆くだけではなく、「わたしたちは希望を持ち続けたいと思います」

（河合）

## 幼児の教育

第一〇四巻 第九号

（二〇〇五年九月号）

定価五五〇円（本体五二四円）

発行 平成十七年九月一日

編集兼発行人 浜口 順子

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二-1-1

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五-21-1

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四一九

〒〇三-五三九五-六六一三（営業）

〒〇三-五三九五-六六〇四（編集）

振替 〇〇一九〇-11-19640

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。



最 新 刊

赤ちゃん保育が  
わかる！



# 「ていねいな まなざし」でみる 乳幼児保育

AB判(26×21cm)

80頁

定価1,890円(税込)

井 桁 容 子 (東京家政大学ナースリールーム主任)／著  
汐 見 稔 幸 (東京大学教授)／解説

ビデオ撮影による乳幼児保育の記録。園児の遊びの様子、他児や保育者などのかかわりの様子がつぶさに観察、分析されており、「どのような視線で子どもをみればよいのか」がわかります。赤ちゃん保育を実践するうえで、必見の本です。

今度は手首をつかって  
上向きにして投げます。



本文より



次は後ろ側に！



本体が動いているうちに、今度はふたを！

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。



最

新

刊

子どもの創造力を育み、アート感覚を養う本

# はちみつ の じかん

— 子どもの造形には物語がある —

「すてきなステッキ」  
「まどぎわえほん」  
「いたずらっこのぞきあな」  
など、  
創造性あふれる、  
造形作品の  
創り方(造形遊び)を  
紹介しています。



B5ワイド判(19×26cm)  
64頁  
オールカラー  
定価1,680円(税込)

- こやま こいこ / 著
- 京都造形芸術大学芸術教育研究センターこども芸術大学  
芸術文化情報センターピッコリー / 協力



構成

- PART1 はいひんへんしん
- PART2 紙でつくる
- PART3 色をたのしむ
- PART4 自然の中から

キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。